

「川の流れるように」 ヨハネ7章32-39節

「川の流れるように」と言えば、美空ひばりさんのヒット曲です。

ああ 川の流れるように ゆるやかに いくつも 時代は過ぎて
ああ 川の流れるように とめどなく 空が黄昏（たそがれ）に 染まるだけ

慌しい時代に生きる私たちに、「そんなに忙しく生きてどうするんだ。もっとゆったりと、穏やかに、生きたらどうか。人生とは川の流れるようなものではないか」と呼びかけております。でも神さまを知る者としては、単に思い出を「良きもの」で終わらせるのではなく、その中に神さまの恵みを数えるような視点が、求められているのでしょうか。「あの時も神さまが共にいてくださった。この時も神さまが導いてくださった。ありがとうございます」と。人生とは確かに流れる川のようなものであります。そこに身をまかせて、穏やかに生きることも赦されています。私たちの目には、どこへ行くかわからない川であっても、確かに導いてくださる方がいる。美空ひばりさんの「川の流れるように」の歌と、今日の聖書の意味は、必ずしも同じ意味ではありません。

37節の祭りとは、ユダヤ教の三大祭りの一つ、「仮庵の祭り」のことです。荒れ野において、神さまは多くの奇跡を通して命を養い続けてくださったのです。そのことを記念し感謝する祭りは、やがて秋の収穫感謝の要素を取り入れ、同時に雨乞いの祭りと変遷しました。この祭りで決定的な役割を果たすのは水です。それを前提として、イエスさまはこのように言われました。「渴いている人はだれでも、わたしのところに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書に書いてあるとおり、その人の内から生きた水が川となって流れ出るようになる」(37-38節)。ここでは人生を川の流れるようにあふれ出すのではなく、神さま、あるいはイエスさまから、「生きた水」が川の流れるようにあふれ出すというのです。それは、私たちを生かす力、恵みです。神さま、イエスさまから、「生きた水」が川の流れるようにあふれ出す。この力、恵のことを、ヨハネは“霊”と呼んでいます。「イエスは、御自分を信じる人が受けようとしている“霊”について言われたのである」(39節)。飢え渴いている者がイエスさまのもとに来ると、永遠に飢えなくなる、永遠に渴かなくなる、永遠のいのちが与えられるという話です。人生には飢え渴きがあります。どうしても満たされないこと、困ってしまうこと、渴いてしまうことがあります。聖書は、人間のそのような状態を「義に飢え渴く」と表現します。「義」には、「救い」という意味が含まれます。人間の側から見れば「救われる権利」でもあります。本来ならば救われる権利を持っているはずなのに、人として尊重されるべきなのに、なぜか人生の苦しみに直面したり、不当に貶められたりする時に、わたしたちは義に飢え渴くのです。教会は義に飢え渴く人の集まりです。自分自身の飢え渴き、隣人の飢え渴きを身に染みている人たちが、イエスさまのもとに集まり食卓を共にする、つまり礼拝をする、そして共に救いを経験する、神さまから愛されていることを実感し、互いに尊重し合う、世界で実現していない義が、今・ここに・暫定的に実現していると知る、これが教会という交わりの本質です。

川の流れのようにただ生きている私たちがいる。しかし、その裏には、神さまの計り知れない力である霊と、恵みが、それぞれに与えられています。私たち礼拝に集う民の教会は、復活のイエス・キリストの神殿としての体そのものであり、その体には聖霊がいつも新たに湧き出で、さらに人を生かす命の水が川のように流れ出るのです。そして、それは礼拝の時に起こるのです。私たちも、この礼拝の中でキリストの言によって罪を知らされ、その赦しを知らされ、そして復活の主イエスと出会い、「イエスは主である」と信仰を告白して、神さまの御手の内に入れられたのです。だから一人で聖書を読んでいけばよいというのではなく、共に集い、礼拝の中で命の言葉、命の霊を頂きます。そして生きることが出来る喜び、永遠の命に生かされている喜びを、心から感謝し、讃美しています。そのこと自体が、主イエス・キリストという神殿の中に生かされている現実なのです。

わたしたちには、このような礼拝を通して流れ出る、それぞれの命の水が流れています。わたしたちのうちに働く聖霊がわたしたちから溢れ出す時に、生ける水が自分を破って、自己中心という小さな殻を破って流れ出すのです。いつも神さまのことを考えている方は、そのまま神の霊とともに歩みなさい。でも忙しさの中で礼拝に足を運ぶことが難しい方は、日曜日の歩みだけでなく、平日の歩み・毎日の考え方が問われてきます。あなたは、毎日どんな水を流しているのか、どのように水が流れているのか、と主イエスからの宿題が出されているのです。だからこそ、どんな水を流すかは、個々人にかかってきます。わたしたちは教会で無条件に義を与えられました。どうすれば、義に飢え渴いている人と共に生きるのか。流れている水を切らすことなく、主に委ねる生活を共に祈りながら、歩んでいきたいものです。

ⁱ 「仮庵の祭り」とは、イスラエルの民がエジプトを脱出し、40年間の荒れ野を放浪し、天幕生活を強いられたその出来事を覚える祭り。祭りの規定はレビ記 23:34-43、民数記 29:12-39 を参照。祭りの間、庭や屋上に木の枝で仮小屋を作り、そこに一週間住んで祭りを守る。祭りの七日目には、特別に雨乞いの祈りをささげる。祭りの間には、毎日シロアムの池から水を汲み、神殿の祭壇にこれを注ぐ儀式を行った。祭りの八日目に荘厳な集会がもたれ、一頭の雄牛、一匹の雄羊、7匹の小羊が屠られ、これが「祭りが最も盛大に祝われる終わりの日」。